

## 新シリーズ：日本農業の今と国際耕種の関わり方

### 第2回：生産現場からの報告～有機野菜の宅配から見えること

「安全・安心な食」の確保は最近よく目に、耳にする言葉である。そして、「安全・安心な食」を目指して、『有機栽培野菜』の生産に取り組もうとする動きがある。しかし、農薬や化学肥料を使わないで育てる有機野菜は、当然ながら手間がかかり、大変な労力を必要とする。したがって栽培面積にも限りがあり、価格も通常野菜と比べて一般に割高となる。食における安全・安心のニーズが高まっているにも関わらず、日本における有機農産物の生産・流通量は非常に少なく、有機野菜市場の狭さがその難しさを物語っているとも言える。

今回、そうした有機野菜栽培に取り組んでいる我々の社友の一人、茨城県常陸太田市の K 氏を訪問し、また地区のみなさんにも集まっていたいただき、情報・意見交換をする機会を設けていただいた。交流会には有機栽培農家、畜産農家、兼業農家、農協及び市役所職員、NPO 代表等、幅広い関係者が参加し、夜遅くまで話が続いた。この交流会を通して、地域で頑張っている有機野菜を作っている農家グループと知り合い、さまざまな話を聞いたり、彼らの畑で作業させてもらったりした。彼ら有機農業グループは、周辺農家の平均年齢が 70 歳を越えているのに比べて、20 代も含め比較的若い。栽培は化学肥料や農薬に頼らず、周辺の酪農農家から提供される家畜糞尿や鶏糞等を使用している。農地は人手不足で耕作されなくなった田畑を借り上げる場合が多く、このためいくつもの農地が点在しており、また土壌の状況も場所によって異なっている。農地の多くが狭いため、農機の使用も困難な場所もある。生産物は個人的に発掘した顧客に直接配達したり宅配する形で販売しており、まだ規模は小さいが販路は徐々に拡大していると聞く（次ページ参照）。

彼ら生産者仲間は、農産物の安全性や後継者問題等を抱える現在の日本農業に危機感を持ちながら、意欲的に有機野菜の生産を行っているが、課題もいくつか見受けられる。その一つが、今のところ経済的に十分な収入を得られないことである。また新規参入農民が多いためか、栽培技術の面でもまだ改善の余地がある。さらに、地域の行政や農協との交流が不十分であったり、地域の情報を十分受けていない面も見受けられた。一方我々国際耕種は、これまで途上国支援を通じて、農業・農村開発プロジェクト等においてさまざまな経験をしてきた。こうした海外のプロジェクトで実施してきた、現地農民の栽培技術改善や生計向上プログラム、あるいは研修普及活動等の経験が、日本農業のために何らかの形で活かさないだろうか。

今回の交流会を一つのきっかけとして、今後ともグループメールでの情報交換や現地 NPO と連携して都市と農村の交流会や途上国での活動の紹介といったイベントを開催したり、有機農業グループ月例会へ飛び入り参加したり、いろいろな形で交流を続けていきたい。より直接的なやりとりとしては、彼らの有機野菜を購入するという方法もある。さらに有機栽培だけでなく、減農薬によって安全な農産物作りをめざす活動も近隣地域にあり、こうした地域農家とも情報交換を行いながら、将来的には有機農業というより地域における持続的な資源循環型農業のシステムを作り、畜産農家を含む周辺農家のグループ化やネットワーク形成による地元資源の有効利用にもつながるような試みも必要であると考えられる。



田畑と山が隣り合う中山間地農業



有機栽培畑のネギ苗の移植



堆肥供給源にもなる酪農牛